岡山大学教育学部研究集録　第113号　(2000)　129－139

生涯学習の一環としての合唱活動に関する一考察

－ ある合唱団の事例を通して －

虫　明　眞砂子

生涯学習は，高齢化社会に向けてその重要性が増している。合唱活動は生涯学習の一環として大きな役割を果たすものと期待されるが，生涯学習としての活動の実態は未だ明らかでない。今後，合唱活動を生涯学習の中で積極的に活用していくための具体的方針を確立するために，まず活動の現状と問題点を明らかにする必要がある。今回，岡山県内で活動している社会人を主体とする合唱団を調査し，合唱団員の側から見た活動の意義，合唱団の抱えている問題等を探った。その結果，合唱団における合唱活動により，音楽に対する興味が一層深まった，仕事上のストレスが発散できた，日常生活で表情が明るく豊かになった等，この活動が各人に有効に作用していることが分かった。また，社会人として合唱活動を始め，その活動を継続する動機付けとして，学生時代の学校内での部活動，学校外における合唱活動，さらに家庭における音楽経験が強く影響していることが分かった。合唱団の抱えている問題点としては，有能な合唱指導者に恵まれないこと，合唱団員の活動時間が足りないこと等が明らかとなった。

Keywords：生涯学習，高齢化社会，合唱活動，指導者不足

Ⅰ．研究目的

1965年に「生涯教育について」という議題で成人教育推進委員会がユネスコで開催された。その席で，ポール・ラングラン[1]は，「人間の教育というものは，生涯のある時期だけに限られるものでなく，人の生涯を通して保障されなければならない。あるいは生涯を通じてなされなければならない[2]」という提言を行った。その後，自発的な学習という点から生涯教育ではなく生涯学習とすべきという意見が強くなり，最近では，生涯学習ということばに統一されている。現在，生涯学習ということばは，人々が生涯を通じて，各人が自発的思想に基づいて行うことを基本として行う学習活動の総体を意味すると解されている。したがって，家庭教育，学校教育，社会教育，職業訓練，企業内教育訓練だけでなく，スポーツ活動，文化活動，趣味，レクリエーション活動，ボランティア活動等あらゆる学習を包括する[3]。

日本における生涯学習の現状を見ると，近年，高齢化社会への移行によって，生きがいを求めて自らの可能性を探る学習が盛んになってきている。公民館やカルチャーセンターでは，多様な学習機会が設けられ，各市町村の役所や教育委員会には，生涯学習課が創設され，学習の機会を提供したり，地域の文化振興ビジョンを検討している。また，学校教育では，少子化，いじめ，不登校生の増加，2002年から完全実施される学校週５日制の実施，総合的学習の導入などさまざまな要因によって，「ゆとりの中で自ら学び自ら考える力などの生きる力」が育成の基本とされることとなった。国立大学においては，全国の教育学部改組に伴い，生涯教育課程及びコースが多数創設された。さらに私立大学では，音楽療法士の免許取得を目的に，福祉大学と音楽学部を持つ大学とが提携するところが出てきた。そしてこのたび，文部省が「塾を敵視」の政策を転換し，小学生の英会話教育を英語塾などに委託し，費用を補助する制度を始める。これについて，文部省は，「学校教育と学校外の民間教育をことさら区別する時代

岡山大学教育学部音楽教育講座　700－8530　岡山市津島中３－１－１
A study of chorus activities in lifelong learning : based on a case study of a chorus
Masako MUSHIAKI
Department of Music Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

でなくなった[4]」と述べている。

以上のような生涯学習に関わる流れは，学校や社会，家庭において従来各々が担っていた役割について再考を迫るものである。しかし，1981年の中央教育審議会答申において，生涯学習推進が学校教育を含めた教育全般にわたるもの生涯学習が位置付けられるようになってから20年近く経過した現在でも，生涯学習は，公民館，生涯学習センター，カルチャーセンターや文化会館などの施設による講習会，大学における公開講座等など成人を対象としたものが大部分を占めている。学校教育や社会教育，家庭教育との連携は，生涯学習の展開上重要課題とされてきた。しかし，その具体的施策はいまだ十分とは言えない。日本では従来，学校教育，社会教育と生涯教育とが分離して考えられてきたが，現在では，社会教育は生涯学習の一部であること，生涯学習には学校教育や家庭教育も含まれることを明確にしておく必要がある。

合唱活動においても，当然このような状態はその活動のあり方に影響を与えている。学校教育の中では，音楽関係の部活動において合唱部の活動は低迷している現状がある[5]。しかし逆に，学校外の合唱活動は活発になってきたように見受けられる。このことは，少年少女合唱団や社会人合唱団数，NHK全国学校音楽コンクールへの参加校の推移からも明らかである[6]。合唱活動は，学校教育の場から社会教育の場に移行していくことを示唆しているとも考えられる。しかし，このことは生涯学習の観点から検討する必要があると考えられる。そこで本論文では，社会人を主体とするC合唱団の事例研究を通して，生涯学習における合唱活動のあり方について考察する。

II．研究方法

岡山県内で活動している社会人を主体とするC合唱団[7]に対してアンケート調査による調査を行った。

1．調査対象者

アンケート調査は，合唱団員28名を対象に行った。内訳は次のようになっている。

性別　男13名，女15名

年齢　20代11名，30代17名

職業　学生４名，主婦７名，会社員６名，公務員11名（教員４名を含む）

住居　岡山市内13名，倉敷市内２名，岡山県内４名（総社市３名，笠岡市１名），岡山県外９名（広島県３名，島根県２名，兵庫県１名，大阪府２名，奈良県１名）

2．調査期間　平成11年10月23日～平成11年11月６日

3．意識調査の概要

調査内容は，合唱活動の経験（１項目），合唱活動の動機等（２項目），合唱活動の目的等（３項目），学校・社会・家庭教育で受けた音楽経験と現在の合唱活動（３項目），生涯学習における合唱活動の問題点（１項目）について，選択方式と記述方式で行った。

III．結果及び考察

意識調査の結果を項目順にしたがって考察していく。なお，自由記述については，同一内容と考えられる回答は整理した。

1．現在の合唱団に入る前，どのような合唱活動をされていましたか。

団員全員が何らかの合唱経験を持っていることが分かった。特に高校や，大学，市民合唱団等の活動が多い（合計75.4%）ことから，成人に近い時期での活動がその後の活動に大きく影響していることが考えられる（表１）。

表１　合唱活動歴（複数回答）

活動時期	計（%）
①小学校部活等	4(6.6)
②中学校部活等	5(8.2)
③高校の部活等	14(22.9)
④大学のサークル等	22(36.1)
⑤少年少女合唱団等	4(6.6)
⑥市民合唱団等	10(16.4)
⑦職場の合唱団等	2(3.2)
⑧合唱経験なし	0(0)
合　計	61

高校や大学の時期には，声が安定しているため，ハーモニーの充実感が得られやすい。そのためか，そのまま社会人の合唱団へ移行しているという状況が考えられる。したがって，これらの時期は生涯学習としての合唱を培いやすいと言える。一方，小・中学校の部活や少年少女合唱団出が非常に少ない。このことは，小学校高学年や中学校時代は，変声期で声も出しにくくなる時期でもあり，声を楽器として自分自身が体感することが難しいため，その後の活動へ継続できないのであろう。したがって，その時期を境にして合唱活動を止めてしまう者もいるのではないだろうか。小・中学校で変声期になった子供に変声期終了後にも，合唱活動ができるような楽

しい思い出を残すことによって，高校以降も合唱活動ができるようにすることが臨まれる。以上の知見から，高校以降の合唱活動がその後の生涯学習に大きく影響していると考えられる。

2．この合唱団で合唱活動を行いたいと思った動機は何ですか。(自由記述)

この設問では，現在の合唱団の活動動機を尋ねた。大きく，人間関係，音楽面，活動面に関するものに区分できた。まず，音楽面と人間関係，活動面とが大きな動機付けとなっている（表2）。

表2　合唱活動の動機

区分	主な内容	合計（%）
人間関係	・友人・知人が多い…14件 ・仕事上でない仲間と知り合いたい…1件 ・指揮者に魅力がある…1件	16件(33.3)
音楽面	・より高い次元（練習内容・演奏）で合唱が行える…20件 ・自分の能力を成長させることができる…2件	22件(45.8)
活動面	・真面目に熱心に取り組んでいる…6件 ・合唱コンクールに出たかった…2件	8件(16.7)
その他	・リフレッシュしたい…1件 ・練習場所が近い練習日の都合がよい…1件	2件(4.2)
合計		48件

人間関係では，知人・友人が多い。このことは，大学のサークル活動での仲間が中心になって創られたことがその理由であろう。音楽面では，より高いレベルを目指すた練習やその意欲が挙がっている。また，活動面では，団員が熱心な取り組み，一人一人が自主的に音楽づくりに取り組むことが動機付けとなっている。これは，他の市民合唱団や職場の合唱団の活動経験（表1,19.6%），県外から参加している者が9名もいること（Ⅱ研究方法を参照）にも表れている。

以上のように，この団での合唱活動は，仲間がともに音楽的に高い目標を持つことによって意欲的な活動を行っていることが，入団の大きな動機付けとなっている。その他，リフレッシュしたい，練習の場所，曜日の都合がよいことは，生涯学習の面からの動機付けになり得ることが示唆されている。

3．合唱または合唱活動のどこに魅力を感じますか。(自由記述)

この設問では，合唱及び合唱活動の魅力について尋ねた。その結果，ほとんどの者が音楽面に関するものであった（表3・85.7%）。

表3　合唱・合唱活動の魅力

区分	主な内容	合計（%）
音楽面	・歌詞を伝えること…1件 ・体が楽器になる肉声の面白さ・魅力…6件 ・皆で音楽を創りあげる時の充実感・高揚感…15件 ・ハーモニーを合わせること…8件	30件(85.7)
その他	・コンクールに出場し結果を得ること…1件 ・人を感動させるところ…2件 ・有名なホールやオーケストラと競演できる…1件 ・友人・仲間を作れること…1件	5件(14.3)
合計		35件

ハーモニーの魅力と皆で音楽を創りあげる時の充実感，歌うことの面白さが多かった。

ハーモニーの美しさを感じたり表現することは，独唱のようなメロディー線的要素と比べてハーモニーを体感できる面白さがある。また，身体が楽器となるため，声を出す心地よさを直接体感できる魅力もある。歌うことは，人間の根源的な営みである。その例として，「社会生活をしていて，人として生きていることを実感できる」という生涯学習の目的ともいえる意見もあった（男・会社員）。合唱活動は，年齢や職業などの違いはあっても音楽を一緒に創り上げていくことで感動を分かち合うことができる。これによって，仲間意識を高めていくことは，人と人のコミュニケーションの広がりにとって重要である。これは，生涯学習にとって重要な要素と考えられる。

4．合唱活動の目的は何ですか。

この設問では活動の目的について尋ねた。まず，生きがいや楽しみという回答が過半数を占めた（表4）。

合唱活動が生きがいや楽しみになっているということは，生涯学習としての活動の基本になるものである。次に，人との交流，余暇の利用が挙げられている。この項では，⑥合唱指導者となる以外の目的は，1981年の中教審「生涯教育について」にも示さ

表4　合唱活動の目的（複数回答）

内　　容	計(%)
①生きがいや楽しみのため	43(55.1)
②職業に生かすため	3(3.8)
③人との交流	16(20.5)
④余暇の利用	7(8.0)
⑤健康のため	7(8.0)
⑥合唱指導者となるため	2(2.6)
合　　計	78

れた生涯教育の理念である「国民一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって学習する[8]」ための目的になり得るものである。

5．合唱活動を行うことによって，自分の身体，性格，生活に何か変化がありましたか。（自由記述）

表5　合唱活動による自身の変化

区　分	主　な　内　容	合計（%）
身体面	・体の機能を感じられるようになった…1件 ・リラックスができる…3件 ・健康になった…2件	6件(11.8)
性格面	・自信が持てるようになった…5件 ・充実し満足感がある…4件 ・表情が豊かに，明るくなった…6件 ・家族に優しくなれるようになった…2件	17件(33.3)
生活面	・生きがいと楽しみが持てる…3件 ・ストレスの発散・リフレッシュができる…5件 ・人間関係が広がった…2件 ・生活にリズムができた…4件	14件(27.4)
音楽面	・音楽に対する興味が湧いた…7件 ・歌の詩について考えさせられるようになった…1件	8件(15.7)
その他	・目標ができた…1件 ・何事にもバランス感覚を意識するようになった…1件 ・生涯のパートナーと出会えた…2件 ・合唱連盟の世話役などが入り，多忙になった…1件 ・行動範囲が広がった…1件	6件(11.8)
合　　計		51件

この設問では，合唱活動によって自分自身の中でどのような変化が見られたかを尋ねた。大きく，身体面，性格面，生活面，音楽面，その他に区分することができた（表5）。

まず，性格的な面と生活面での変化が挙げられた。性格面では，充実感や満足感によって明るく自信が持てるようになったことが挙がっている。これは，生活面にも影響し，ストレスの発散やよい家族関係を生んでいるようである。また，生活にメリハリができたという意見もあった。身体面では，リラックスができる，健康になるなどが続いている。その他では，パートナーとの出会いや合唱連盟の仕事が挙げられている。その他の一部を除けば，ほとんどの団員がよい結果を得ていると回答している。これらの結果は，設問5の合唱活動の目的で示された「生きがいや楽しみ」とまさに合致している。

6．今後どのような音楽レベルを希望されますか[9]。

この設問では，どのような音楽レベルを目指すかを尋ねた。音楽レベルの内容として，発声，表現，曲目について質問した。合唱団員の年齢が，20代，30代前半であり，結成時より常に高い目標を持ち続けたため大変積極的な回答を得た（表6，7，8）。発声や表現の音楽レベルについては，ほとんどの団員がより高いレベルを求めていることが分かる。

曲目の音楽レベルについては，団員の中でも意見が分かれた。これは，発声や表現の音楽レベルに関する個々の認識のばらつきがその原因になっているのではないかと考えられる。その他では，音楽面で，発声を向上させたいという意見が比較的多く，

表6　希望する発声の音楽レベル

内　　容	計（%）
①レベルを上げたいし，可能であると思う	24 (85.7)
②レベルを上げたいが，現状維持にとどまると思う	4 (14.3)
③現在のレベルを維持したいし，可能であると思う	0 (0)
④現在の音楽レベルを維持したいが，無理であると思う	0 (0)
⑤今のレベルは高すぎるので，下げてほしい	0 (0)
合　　計	28

表7　希望する表現の音楽レベル

内　　容	計（%）
①レベルを上げたいし，可能であると思う	27 (96.4)
②レベルを上げたいが，現状維持にとどまると思う	1 (3.6)
③現在のレベルを維持したいし，可能であると思う	0 (0)
④現在の音楽レベルを維持したいが，無理であると思う	0 (0)
⑤今のレベルは高すぎるので，下げてほしい	0 (0)
合　　計	28

表8　希望する曲目の音楽レベル

内　　容	計（%）
①レベルを上げたいし，可能であると思う	18 (64.3)
②レベルを上げたいが，現状維持にとどまると思う	1 (3.6)
③現在のレベルを維持したいし，可能であると思う	8 (28.5)
④現在の音楽レベルを維持したいが，無理であると思う	0 (　0)
⑤今のレベルは高すぎるので，下げてほしい	1 (3.6)
合　　計	28

指揮力や音程や響きの正確さを聴く力，指導者としての力をつけたいという意見もあった。また，アマチュアの合唱集団として他によい影響をもたらす団体でありたい，作曲家とタイアップして素晴らしい合唱作品を世の中に送り出していけるような合唱団になりたい等の積極的な意見もあった。

以上の知見から，この合唱団では，音楽レベルのいずれにおいても向上させたいという意欲がみられる。それでは，30代前半までを有する合唱団とは相違する高齢者の合唱団では，どのような音楽レベルを希望しているのであろうか。1992年に結成された高齢者のアンサンブル団体「足立シルバーアンサンブル」の例を挙げてみよう[10]。

表9　希望する音楽レベル

希望する音楽レベル	%
音楽的レベルを上げたいし，可能であると思う。	5.0
音楽的レベルを上げたいが，現状維持にとどまると思う。	50.0
現在の音楽的レベルを維持したいし，可能であると思う。	40.0
現在の音楽的レベルを維持したいが，無理であると思う。	5.0
音楽的レベルを下げたい。今はレベルが高すぎる。	0.0
合　　計	100

高齢者になると体力的な衰えからか積極的な回答が少ない（表9）。しかし，現状を維持していきたいという意見が多いこと（90%）は，楽しみや生きがいを求めていく生涯学習の観点から見ると，音楽活動を続けていく大きな要因になっていくものと考えられる。生涯音楽学習にあっては，個々の学習者が音楽に主体性を獲得し，自己確立することが大切である。したがって，生きがいという精神的充足感が年齢を問わず重要な要因となってくる。

7．学校教育（幼・小・中・高・大）で受けた音楽経験（部活・音楽授業等の合唱経験を含む）は，現在の合唱活動の基礎となっていますか。

この設問では，学校教育と合唱活動の関わりについて尋ねた。部活等の合唱経験者は28名中27名とほぼ全員であった。まず，部活による音楽経験ついて経験者の大部分が合唱活動の基礎になったと回答している（表10）。次に，影響を受けた時期は高校，

表10　部活等による音楽経験

項　　目	計（%）
①大変なっている	18 (66.7)
②なっている	5 (18.5)
③少しはなっている	2 (7.4)
④わからない	1 (3.7)
⑤なっていない	1 (3.7)
合　　計	27

部活等の経験がない者1名

表11　音楽授業による音楽経験

項　　目	計（%）
①大変なっている	5 (18.5)
②なっている	5 (18.5)
③少しはなっている	10 (37.0)
④わからない	2 (7.4)
⑤なっていない	5 (18.5)
合　　計	27

無回答1名

表10①②の回答者のみ（23名）

表12　特に影響を受けた時期（複数回答）

種　　類	計（%）
①幼稚園	0 (　0)
②小学校	1 (2.5)
③中学校	7 (17.5)
④高校	12 (30.0)
⑤大学	20 (50.0)
⑥その他	0 (　0)
合　　計	40

表13　影響を受けた人物（複数回答）

種　　類	計（%）
①教師	9 (20.9)
②合唱指導者	11 (25.6)
③友人	9 (20.9)
④先輩	13 (30.2)
⑤その他	1 (2.3)
合　　計	43

その他：妻

大学が多かった。この結果は，設問1の合唱活動歴と対応している。そして影響を受けた人物としては，先輩，合唱指導者が多い（表13）。しかしながら，音楽授業による音楽経験については意識のばらつきが見られた（表11）。ここで，部活動について

大変基礎となっている，またはなっていると回答した23名（85.2%）がどの時期に影響受けたかを見てみると表12のような結果となった。これからも，部活動は高校，大学の時期に集中しており，変声期を終了した時期からの取り組みが多いことが分かる。一方，音楽授業では，大変基礎となっている，またはなっていると回答した者は10名（37.0%）に留まった。これらの結果より，生涯学習としての合唱活動の基礎は学校教育での音楽授業よりも部活やサークルが基礎になっていると考えられる。部活動のような課外活動は，コンクール等を目指すことで，音楽性を高めていくところが多い。その活動意義は認められるものの，音楽授業との隔たりは大きい。それを解決していくには，音楽授業の学習そのものを発表の場にして，その目標を音楽表現そのものにすることによって意義が認められるようにする必要がある[11]。学校における合唱部等が減少している現状を見ても，今後，音楽授業における合唱活動のあり方について再考を求めなければならないだろう。そうでなければ，今後の合唱人口の増加は困難になるかもしれない。C合唱団の場合，特に部活動の影響を受けた者が，学校教育終了後，活動を継続している。

社会教育と学校教育の連携の重要性は，これまでにも論議されてきた。特に近年は，学校を中心とするこれまでのシステムがさまざまな問題を抱えるようになり，教育改革的問題意識から生涯学習の必要性が説かれている。日本においては，学校教育は生涯学習と切り離されてきたが，今後はヨーロッパのように学校教育が生涯教育・生涯学習にかかる一定の社会教育的機能を果たしていく必要があるのではないか[12]。現行の社会教育法では学校開放が論議されているが，この問題をクリアするには，学習内容あるいは教育方法論の論理的枠組みと思考を構築し，社会教育との実践を検討しなければならない[13]。また，正規の学校教育も生涯学習の一部であることから，学校施設の開放や公開講座の実施などさらに推進されなければならない。岡本薫は，生涯学習の観点から学校の役割を3点述べている[14]。すなわち，①教育内容等の改善，②学校教育の多様化・個性化，③進路指導の改善・充実である。自己教育力の育成の点で，学校での多様な学習機会は生涯学習につながるものである。また，山岸治男は，生涯教育推進体制における学校教育の基本的な役割について，生涯学習に必要な基礎的知識・認識力・学習方法などの習得や興味関心の拡大の習慣育成など，学校教育の根源的な発想の転換を述べている[15]。学校を中心とするこれまでのシステムの変換を求めているものである。総じて，合唱活動は一般的に教育実践においては必ずしも有機的な連携を確立してはいない（表11）。合唱活動は，学校教育での経験が大きく左右するため，地域社会における活動と学校との関わりを再検討していく必要がある。

8．学校外で受けてきた合唱活動（地域の少年少女合唱団・市民合唱団等）は，現在の合唱活動の基礎となっていますか。（該当者のみ）

この設問では，社会教育（学校外教育）での音楽経験と合唱活動について尋ねた。少年少女合唱団等についての回答者からは，少数（5名）であったが，よい結果を得られた。次に，市民合唱団を経験した13名についても，現在の合唱活動に影響しているとの回答を得た（表14，92.3%）。

表14　市民合唱団等

項　　目	計（%）
①大変なっている	8（61.5）
②なっている	2（15.4）
③少しはなっている	2（15.4）
④分からない	1（ 7.7）
⑤なっていない	0（ 0）
合　　計	13

岡山県の場合，合唱活動が，学校教育から社会教育へ移行していく傾向が見られるとはいえ，団員27名中少年少女合唱団で活動した者は，わずか5名に過ぎない[16]。したがって，今回の意識調査からは，生涯学習に通じるものであるかどうかは言及できない。一方，市民合唱団については，合唱活動の基礎となり得ると言えるのではないだろうか。設問7の考察でも述べたが，合唱活動を継続する場合，高校・大学での活動が大きく影響していることから，成人になってからの合唱活動は，生涯学習を継続・発展させるという観点から非常に有意義である。小・中学校では，生涯学習の基礎を築くという観点から，歌唱教育及び合唱活動において変声期に配慮した教授内容を再検討していかなければならないであろう。

9．家庭教育の中で受けた音楽経験は，現在の合唱活動の基礎となっていますか。

この設問では家庭教育の音楽経験と合唱活動について尋ねた。我々の生活の中には，いろいろな場面で音楽とのつながりが大きい。例えば，ピアノ・エレクトーン教室やヴァイオリン教室などをを始め，習慣や行事等の音楽，BGM，職場での音楽活動

表15　家庭教育での音楽経験

項　　目	計（%）
①　大変なっている	3（12.0）
②　なっている	8（32.0）
③　少しはなっている	4（16.0）
④　わからない	4（16.0）
⑤　なっていない	6（24.0）
合　　計	25

無回答3

表16　家庭での音楽経験（自由記述）

区　分	主　な　内　容	計（%）
楽　　器	・ピアノを習った…8件 ・フルートを習った…1件 ・オルガンを習った…1件	10件(52.6)
音楽教育	・ソルフェージュをした…2件 ・音楽教室へ通わされた…1件	3件(15.9)
家庭環境	・クラシック音楽や歌に親しんだ…6件	6件(31.5)
合　　計		19件

等，音楽と人間の関わりは，多岐にわたる。いわゆる趣味・教養の世界がその大部分を占めている。①～③の回答が15名と半数以上の者が家庭教育での音楽経験を認めている（表15）。具体的な音楽経験としては，楽器経験，音楽の基礎教育，家庭環境に分類することができた。まずピアノ等の楽器経験者が多く，次に家庭環境が多かった（表16）。例えば，音楽好き，歌好きの父母の影響でクラシックや歌をよく聴いた，よくコンサートなどに連れて行ってもらった等，家庭での音楽経験が有効であったことが分かる。

日本において，家庭教育は，学校教育の一環として位置付けられ，学校教育を補充したり，代替するものとして考えられてきたところがある[17]。しかし，少子化，女性の就業，学校の週5日制などの要因によって，家庭教育のあり方は変容してきている。家庭での教育力，養育能力の低下は，社会の大きな問題点となっている。これを解決するためには，単一家族だけではなく，家族を取り巻く地域社会，学校との連携を重視していく必要があろう。

以上のような状況を踏まえ，音楽に関して行政は，平成6年の音楽文化振興法や平成10年の教育行政機関と民間教育事業者との連携の促進において，公民館の民間教育事業者への開放などを推進してきている。次にその具体的な例として，音楽文化振興法の第一条を示す[18]。

音楽文化が明るく豊かな国民生活の形成並びに国際相互理解及び国際文化交流の促進に大きく資することをかんがみ，生涯学習の一環として音楽学習の係る環境の整備に関するせ策の基本等について定めることにより，わが国の音楽文化の振興を図り，もって世界文化の進歩及び国際平和に寄与すること。（下線部は筆者による）

下線部に示してあるように，行政としても生涯学習の一環として音楽文化を推進するようになってきている。その結果，全国の公共施設で，「成人ピアノ教室」が展開されるようになった[19]。音楽文化振興法の中では，音楽学習の環境整備のほか，行事や講座の開設や学校施設の開放などが盛り込まれている。公民館活動では，コーラスやカラオケ教室などが圧倒的に多く，今後はもっと広がっていくことが推測される。この合唱団の活動においては，楽器を含めた多様な音楽経験（表16，68.5%）も活動に有効ではないかと考えられる。したがって，幼少期から民間の音楽学習にも積極的に参加することは有意義であると考えられる。

10. 生涯学習における合唱活動について問題点は何だと思われますか[20]。

最後に生涯学習の観点から，合唱活動の問題点について尋ねた。まず，指導者不足の問題が挙げられている（表17，20.3%）。次に，時間不足の問題，仲間不足の問題が挙げられている。

表17　生涯学習における合唱活動の問題点
（複数回答）

項　　目	計（%）
①時間がない	15（19.0）
②活動の情報がない	8（10.1）
③練習場所がない	9（11.4）
④指導者がいない，少ない	16（20.3）
⑤仲間がいない	13（16.5）
⑥費用が高い	3（3.8）
⑦発表できる機会，場所が少ない	5（6.3）
⑧家庭等周辺の理解が得られない	5（6.3）
⑨特にない	2（2.5）
⑩その他	3（3.8）
合　　計	79

合唱活動においては，生涯学習の重要課題として指導者養成の問題がある。合唱関係では指導者の層が特に薄く，実際に合唱団を多角的に指導できるものが非常に少ない状況にある。ここで問題になるのは，生涯学習における指導者の位置付けである。C合唱団の場合，実際の指導にあたっている者は中学校教員である。その他の少年少女合唱団や社会人合

唱団の場合も学校教員が指導者になっている場合がほとんどである。社会教育において従来「指導者」のカテゴリーに含まれてきた人々は，大別して社会教育行政関係職員と社会教育団体等における「民間指導者」である。学校教育と異なり，社会教育では学習活動の主体を学習者に置くため，「指導する」，「教える」という概念は性格的になじまないこととみなされている[21]。廣瀬修一は，学習者を直接に指導する人々を講師と総称し，学習を援助する人々の体制を図1，2のように示している[22]。

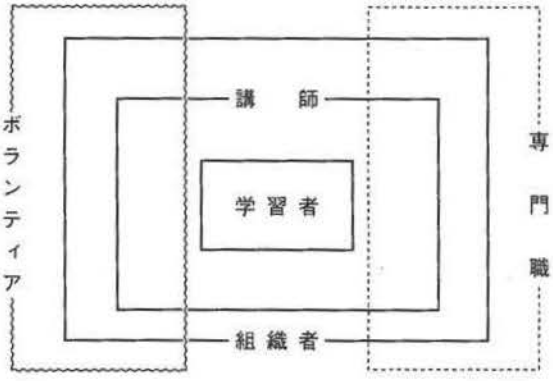

図1　学習者を取り囲む援助者
（典型的な学級・講座の場を想定）

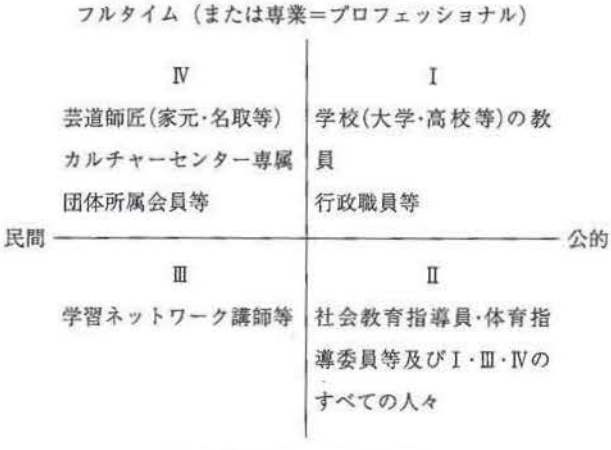

図2　講師の見取り図

援助者は，直接指導をする講師と学習活動を組織し学習過程が円滑に進行できるよう側面から援助する人々の二通りに分けられる。前者は直接技術や知識を介して学習者と関わりあう。講師には大学の教員から芸道の師匠に至るまで非常に幅広く活用されており，彼らは他に本業を持っている。後者はそうした場を設定することを業務にしている人々である。公民館主事や社会教育主事等がこれに当てはまる。生涯学習の領域においては，近年台頭してきたボランティアとして組織に関わる講師の存在がある。この場合，学習者になったり組織者になる相互の役割をしている（図1）。生涯学習において講師の存在は大きい。というのは，学習を向上させるためには必要不可欠だからである。しかしながら，講師の役割は生涯学習に関わると，図1のように曖昧な位置付けになる。講師という職種をさらに2つの観点から整理したのが図2である。すなわち，講師としての関わりがフルタイムであるか，パートタイムであるかによっている。前者はプロとして，後者は兼業ないしはボランティアとして関与することが多い[23]。合唱活動の場合，多くの指導者はⅠ型に属している。すなわち，学校の教員である。設問7で述べたように，学校教育と生涯学習の関わりは非常に重要である。現在その一環としてされている施設開放だけではなく，学校教員を広く活用していくことが，生涯学習推進の大きな原動力になり得るのではないかと考える。そのためには，生涯学習の援助者としての教員の位置付けを明確にし，その基盤である法規的措置や勤務条件等を整備すべきである。近年では，アマチュアによるボランティアの講師も増えつつある。彼らは，講師として限りなくプロを目指しながら，あくまでもボランティアに留まるというものである。一方で専門性を高めつつ，他方で生徒である学習者との水平的関係を維持するという複雑な位置付けになる[24]。今後，生涯学習における講師に対してどのような人材が求められていくのかは，社会・経済の動向とも関連するため，推進していくには時間がかかるであろう。生涯学習における合唱活動の問題点として次に，時間不足，仲間不足が挙げられている（表17）。時間不足については，生涯学習全般においても共通する問題であろう。仲間不足については，その理由として，合唱活動に対する社会的な認知度の低さなどが考えられる。また，地域差もあるだろう。合唱を生涯学習の一環として位置付けるためには，声の魅力を広く大衆に理解してもらうことである。そうすることによって，合唱人口が増加し，音楽全体のレベルアップにつながってくるのではないだろうか。

Ⅳ．ま と め

社会人合唱団の意識調査を通して，以下のような結果を得た。

①学校卒業後に合唱活動を行うには，学校教育，特に高校の部活動や大学のサークル活動経験が重要で，卒業後の活動を行う基盤となっている。さらに，学校外における合唱活動，家庭における音楽経験も強く影響している。

②社会人として合唱活動を始める動機としては，音楽分野の人間関係を広げたいとか音楽面や生活，活動面の充実を求めたいという期待が大きい割合を占めている。
③合唱の魅力は，ハーモニーを感じること，皆で音楽を創ることである。そして，合唱の音楽レベルをさらにアップさせることが希望されている。
④合唱活動の目的は，生きがいや楽しみである。
⑤合唱活動によって，性格面や生活面が充実してくる。
⑥生涯学習における合唱の問題点は，指導者の不足，時間の不足，仲間不足である。

以上の結果から，合唱活動を行う社会人が，活動から生きがいや楽しみを得ていることが分かる。また，このような効果をもたらす合唱活動を社会人として行うためには，学校教育における合唱活動の経験が活動を行うための基盤として重要であることが示唆された。

今後の課題として，県内の他の合唱団，また他県の合唱団の意識調査を行い，比較分析を試みたい。さらに，生涯学習において大学教育は今後どのような役割を担っていくべきかについても検討していきたい。

註

1）1965年に開催されたユネスコの成人教育国際委員会の生涯教育推進部長であった。
2）黒沢惟昭，生涯学習時代の社会教育，明石書店，1992，p.18.
3）太田時男，国立大学と生涯学習，国立大学協会生涯学習特別委員会，1993，p.2.
4）「小学生の英語塾国が半分負担」，朝日新聞朝刊，1999年8月30日.
5）重嶋博，課外活動における音楽，音楽と教育Ⅰ音楽科は何をめざしてきたか，音楽之友社，1996，pp.86 - 88.
6）末尾参考資料1を参照のこと。
7）平成4年に，団員10数名で旗揚げした。平成9年より中国支部代表として全日本合唱コンクール全国大会出場，2年連続銀賞を受賞している。現在の団員数は約35人だが，岡山県外から通ってくる熱心な団員も多い。年齢層は20～30歳代がほとんどという若い混声合唱団である。
8）前掲書2，p.24.
9）この設問は，丸林実千代著「生涯音楽学習入門」p.123を参考にした。
10）丸林実千代，生涯音楽学習入門，音楽の友社，1999，pp.123 - 129.
11）前掲書5，p.91.
12）山田定市監修，生涯学習を組織するもの，北樹出版，1997，pp.174 - 176.
13）前掲書6，pp.283 - 286を参照。
14）岡本薫，行政関係者のための新版・生涯学習政策，全日本社会教育連合会，1998，p.103.
15）中嶋明勲・星永俊，21世紀への社会教育，ミネルヴァ書房，1992，p.73.
16）末尾参考資料1合唱活動の現状を参照のこと。
17）前掲書12，p.191.
18）文化庁文化部地域文化振興課，音楽文化の進行のための学習環境の整備等に関する法律について，社会教育53(7)，社会教育研究会，1998，p.34.
19）ヤマハ㈱コミュニティサポート事業部，行政が公共施設にて実施する音楽講座の進展について，社会教育53(7)，社会教育研究会，1998，pp.32 - 33.
20）この設問は，岡山県生活環境部県民生活課による文化に関する県民意識調査（1998）を参考にした。
21）前掲書6，p.241 - 242.
22）香川正弘編著，生涯学習論，東洋館出版社，1992，pp.52 - 68.
23）上掲書，p.54.
24）上掲書，pp.55 - 57.

参考資料1

合唱活動の現状

岡山県では，学校の部活動において合唱部の活動は低迷している現状がある。しかしながら，学校外の合唱活動は活発になってきたように見受けられる。合唱活動の全国的の大きな活動組織として，日本の少年少女合唱団，NHK全国学校音楽コンクール，全日本合唱連盟の活動を挙げることができるだろう。まず，この3組織の活動状況を調査し，学校教育と社会教育における合唱活動の変化を考察する。なおここでは，全国の小中学校における合唱祭やクラス合唱等の学校での取り組みについては割愛する。

1．少年少女合唱団

平成10年6月現在で，日本全国にある少年少女合唱団は約500団体で，このうち9団体が少年合唱団である（財団法人桃太郎少年合唱団の調査による）。最近の傾向として，合唱団員の減少が指摘されている。少年少女合唱団の主な全国組織は①全日

本合唱連盟，②全日本少年少女合唱連盟，③JjCS－日本少年少女合唱連盟である。主な活動状況は，全日本合唱連盟が主催し毎年８月に開催される全日本ジュニアコーラスフェスティバル（主に東京，1986年開催年），全日本少年少女合唱連盟が主催し毎年３月に開催される全日本少年少女合唱祭（西日本各地），JjCS－日本少年少女合唱連盟が主催して毎年３月に合同演奏会（東京）を開催している。以前は全日本少年少女合唱連盟が東日本少女合唱連盟と西日本少女合唱連盟別々に毎年３月合同演奏会を開催し，さらに数年に一度東西合同の演奏会を行ってきたが，1989年に東日本少女合唱連盟が全日本少年少女合唱連盟～分かれ，JjCS－日本少年少女合唱連盟を作った経緯がある。現在活動している合唱団を中国地区でまとめた（表１）。

表１　少年少女合唱団体数　　平成10年６月

中国地区	団体数	順位
鳥取県	4	4
島根県	2	5
岡山県	19	1
広島県	16	2
山口県	5	3

２．全日本合唱連盟

全日本合唱連盟の目的は，合唱音楽の普及と向上，合唱団の育成と指導，音楽文化の発展に寄与することとある。９つの支部からなり，加盟団体数は，4786団体にも及ぶ（平成11年１月現在）。中国地区の加盟団体数をまとめると，表２のようになる。連盟の主な事業は，①全日本合唱コンクール全国大会，②全日本おかあさんコーラス全国大会，③全日本ジュニアコーラス・フェスティバル，④コーラスワークショップ，⑤おかあさんカンタート，⑥合唱センターの運営，⑦国際交流事業，⑧出版事業，⑨合唱組曲の作品公募，その他である。

表２　加盟団体数（中国地区）　　平成11年４月

団体	少年	中学	高校	大学	職場	母	一般	個人	合計	順位
鳥取	4	7	7	1	1	15	5	0	40	5
島根	2	10	8	1	1	13	7	0	42	4
岡山	4	8	8	8	2	24	22	0	76	2
広島	6	4	7	2	3	70	23	0	115	1
山口	2	13	9	1	1	27	11	0	64	3
中国	18	42	39	13	8	149	68	0	337	

３．NHK全国学校音楽コンクール

NHKが昭和７年から主催し，平成11年度で66回を迎える。学校における合唱の底辺を広げると同時に，合唱活動を通して豊かな音楽生活を育てるコンクールを目指してきた。コンクール審査は，学校における音楽教育，とくに合唱活動を育成しようという目的に基づいて行われている。ここ数年参加校は減少し，中国地区は開催さえ危ぶまれる状態になっている（表３）。

表３　中国地区の参加校数　　平成11年８月

	小学校	中学校	高校	合計	順位
鳥取県	4校(120人)	2校(73人)	1校(13人)	7校	5
島根県	13校(385人)	15校(479人)	6校(140人)	34校	1
岡山県	2校(77人)	6校(125人)	2校(51人)	10校	4
広島県	4校(139人)	5校(177人)	7校(174人)	19校	3
山口県	9校(357人)	8校(211人)	3校(91人)	20校	2

表４　岡山県の参加校数　　平成11年８月

	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年
小学校	4	3	4	2	2	1	2
高校	6	2	4	2	2	1	2

少年少女合唱団は，社会教育における（学校外活動）であり，全日本合唱連盟は，中学校・高校・大学の学校教育と成人による社会教育の混在であり，NHK全国学校音楽コンクールは，学校教育の活動と位置付けることができる。中国地区の中でも合唱の盛んな県である島根県と岡山県の比較をする。岡山県の場合，中国地区の中でも特に少年少女合唱団の数は多い（表１）。全日本合唱連盟への中・高・大の加盟団体数も中国地区では一番多く，成人を含めても２位である（表２）。しかし，NHK全国学校音楽コンクールへの参加は非常に少なく，開催さえ危ぶまれる危機的状況である（表３，４）。合唱レベルが全国的にも高いである島根県の場合はどうだろうか。少年少女合唱団数は２団体と中国地区の中で最も少ない（表１）。全日本合唱連盟への中・高・大の加盟は岡山についで多いが，成人を含めると４位となり，あまり活発ではない（表２）。しかし，NHK全国学校音楽コンクールへの参加校は非常に多い（表３）。NHK全国学校音楽コンクールは，課題曲のレベルが高く，コンクールに出場するための声楽の専門的な指導と教師の指揮力が必要となる。このコンクールは，音楽性を高めるという技

術的な表現力を試すことにおいて意義が認められるものの，学校の音楽授業からはだんだん遊離し，特殊化ないし専門家の方向に向かっているといえよう（重嶋博，音楽と教育Ⅰp.92，1996）。島根県の場合，学校現場でも課題曲をクリアできる高い合唱能力を備え，毎年のように全国大会まで出場し上位の成績を納めている。また，社会人合唱団も少数ではあるがそのレベルは高く，全国大会でも上位に入っている。この2県を比較すると，次のように推察できる。

①岡山県の合唱活動は，学校教育での合唱活動が衰退し，社会教育へ移行しつつある。

②島根県の合唱活動は，学校教育での合唱活動が非常に盛んで，児童生徒は学校教育での合唱活動に満足しているため，社会教育での合唱は低迷している。

③合唱レベルは，学校教育での活動が活発でないと上がりにくい。